# 詩誌「海盤車」――“Étoile de Mer”――細目（稿）

飛高隆夫

## はじめに

本稿は、詩誌「海盤車」またの名“Étoile de Mer”の細目である。同誌は第二十四号まで刊行されたが、この細目では、その中の三号（第一巻第二号、第二巻第八号、第三巻第十四号）を欠いているので、「細目（稿）」とした。

「海盤車」またの名“Étoile de Mer”といったのは、創刊号の表紙をみると（図版参照）、まず、一番上に大きく“Étoile de Mer”とあり、その下に小さく「海盤車」とあり、その下に“NO. 1, PREMIERE ANNÉE.”とある。そして、表紙絵をはさんで、“FEV, 1932, JAPON.”とある。これを見ると、“Étoile de Mer”が正式の題名で、「海盤車」は副題名、あるいは訳語のように見える。そして、第二巻第十一号からは、表紙の「海盤車」は消えてしまうのである。しかし、奥付および裏表紙には「海盤車」とあり、刊行所（発行所）は「海盤車刊行所」である。編輯兼発行人の意識では、やはり、“Étoile de Mer”が正式の題名と考えられるが、この稿では便宜上、「海盤車」で統一することにする。「海盤車」（Étoile de Mer＝海の星）はヒトデのことである。

“Étoile de Mer”という誌名は、マン・レイ（MAN RAY 一八九〇―一九七六　写真家、画家、映画監督、詩人）の同題の映画によるものと推定する。ニール・ボールドウィン著鈴木主税訳『マン・レイ』（平成五年七月、草思社刊）によると、同映画は、マン・レイがデスノスの詩「星の場所」の劇的なイメージに感動し、それを映画化したもので、「デスノスの詩は、タイトルこそ『海の星（ひとで）』に変わったものの、忠実に映画化され」、一九二八年五月にステュディオ・ユルスリーヌで公開されたという。また、「ひとでは、デスノスにとって重要な象徴的概念であり、彼自身の言葉によると「失われた愛、忘れてしまった愛の化身」だった。」「海の星たるひとでは、空のかなたにいると同時に海の底にもいるという、シュルレアリスト好みの神秘主義的な二重の運命をになっている。そのことがまた、両義的なオブジェの好きなマン・レイの共感をそそったのだ。」という。

「海盤車」に、「創刊の辞」に類した名乗りの文章はないが、創刊号の巻末に、次のような囲みの文章がある（題名は目次にある）。

花園に咲く花は愚劣な花にすぎない。街路樹は歩くことが出来ないにしても切実に嵐に向ふものはより多く人生の往来に接する。

昨日東の空から太陽が自転車で登場した。だが明日も亦東の空から太陽がのぼるであらうか。

何が悲哀であり何が喜悦であるか。誰が泥濘の中の清浄を喜んだか。

だから多くのことがなされねばならぬ。巨大な羽毛が軽蔑せられ

ねばならぬ。玉手箱の如きものはあけられねばならぬ。
既にながれるものはながれてゆく。多くの我々は奇蹟を持たぬ。
我々は階段をあがるべきであらう。
右は野蛮にも自ら放尿せんとする僕達の言葉である。
Homo sum et nil humani a me alienumputo. (Terentius)

署名は（Cato）、つまり加藤一である。

なお、第二十四号に「終刊の辞」、あるいは、それに類した文章はない。

「海盤車」の編輯兼発行人は全二十四号を通して麻生正であり、刊行所は麻生の住所である。従って、刊行所は、麻生の移転にともなって、横浜・神戸・名古屋と移っている。すでに記したように、最終巻は第六巻第二十四号である。つまり、六年間で二十四冊を刊行したわけであるが、雑誌の消長を知る一助となると思うので、刊行所と各号の刊行年月日、および、本文のページ数を記して置く（刊行年月日は細目中にも記してある）。

刊行所　横浜市中区太田町三丁目三十八番地

| | | |
|---|---|---|
| 第一巻第一号 | 昭和七年二月二十日 | 一〇 |
| 第二号 | 昭和七年六月一日 | 一〇 |
| 第三号 | 昭和七年八月十日 | 一〇 |
| 第四号 | 昭和七年十月十日 | 一六 |
| 第五号 | 昭和七年十二月五日 | 二〇 |
| 第六号 | 昭和八年二月十五日 | 一四 |
| 第二巻第七号 | 昭和八年六月五日 | 一五 |
| 第八号 | 昭和八年八月十日 | 二七 |
| 第九号 | 昭和八年十月五日 | 一八 |
| 第十号 | 昭和八年十二月二十日 | 一四 |
| 第十一号 | 昭和九年二月十五日 | 三二 |
| 第十二号 | | |
| 第三巻第十三号 | 昭和九年九月一日 | 二四 |
| 第十四号 | 昭和九年十二月一日 | 二一 |
| 第十五号 | 昭和十年二月十日 | 二六 |
| 第十六号 | 昭和十年四月十日 | 一七 |
| 第四巻第十七号 | 昭和十年八月十日 | 一二 |
| 第十八号 | | |
| 第十九号 | | |

刊行所　神戸市葺合区八幡通五丁目一〇六

| | | |
|---|---|---|
| 第五巻第二十号 | 昭和十一年一月一日 | 一七 |
| 第二十一号 | 昭和十一年六月一日 | 一八 |
| 第二十二号 | 昭和十一年十一月五日 | 二三 |
| 第六巻第二十三号 | 昭和十二年四月三十日 | 一六 |
| 第二十四号 | 昭和十二年十一月一日 | 二〇 |

刊行所　名古屋市東区清水町七丁目一林方

以上の通りで、創刊時には年間六冊の刊行が、終刊の年には年間二冊の刊行になっている。なお、現在のところ、第十四号の刊行所は不明である。

「海盤車」はA4判変型（天地二七二ミリ、左右二〇〇ミリ）である。この項は角川書店川久保十士雄氏の御教示による。

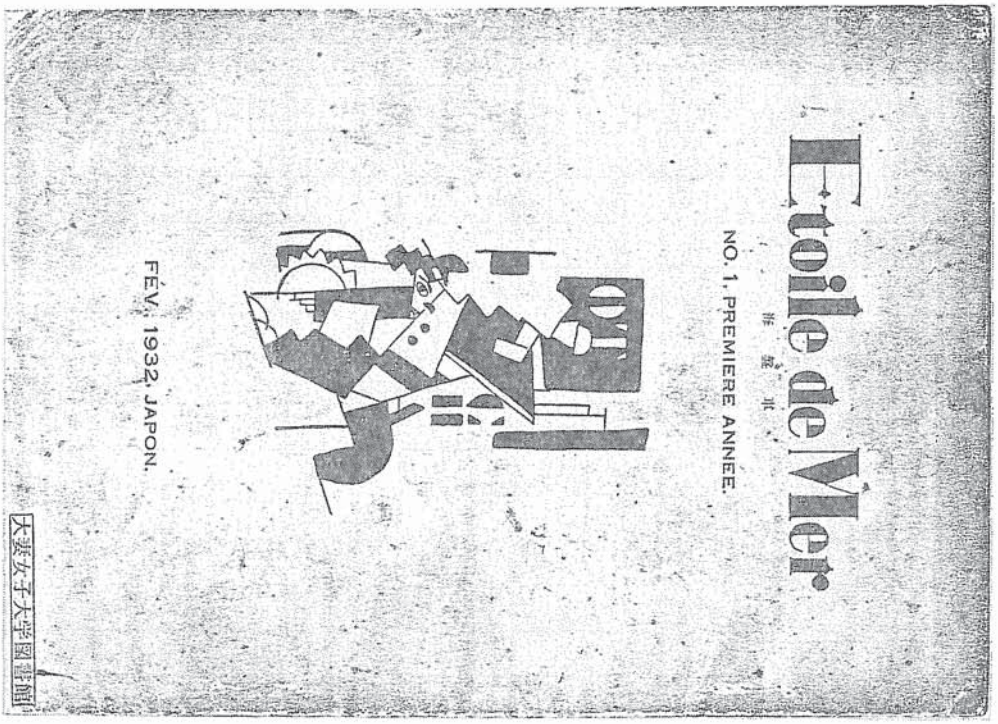
「海盤車」にはページづけはないが、念のために付けておいた。

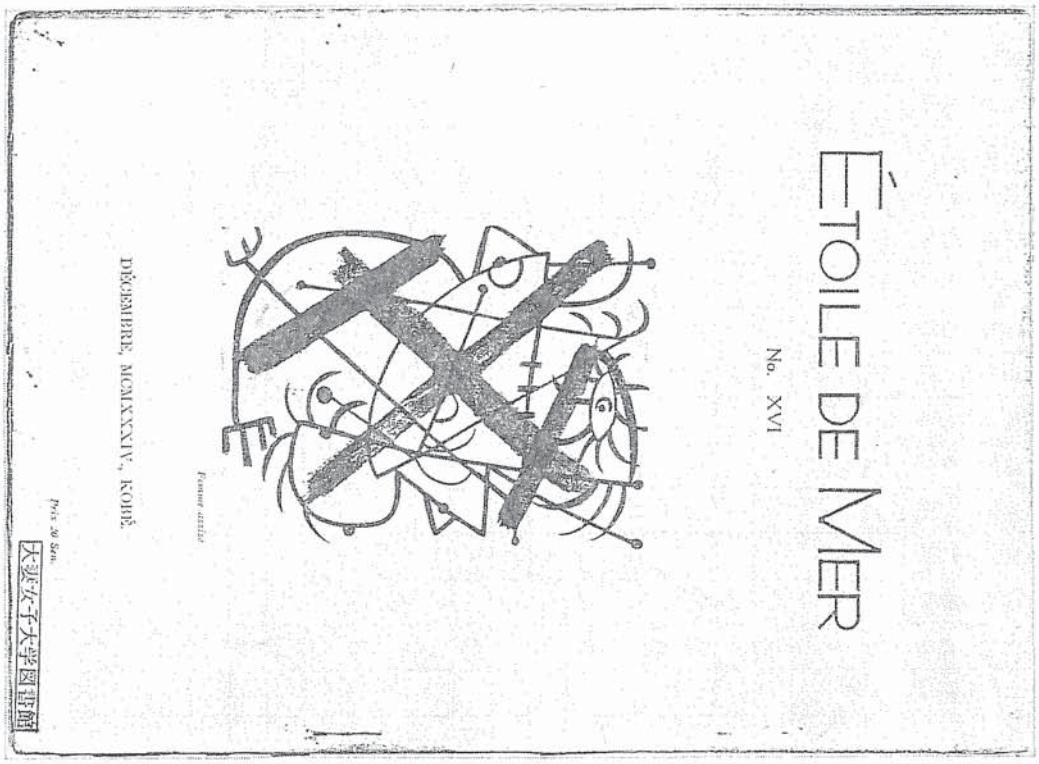
定価は二十銭で変わらない。

細目の紙面が煩雑になることを避けて、注は最小限におさえた。注は＊印で示した。

「海盤車」執筆一覧表

| 氏　名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 麻生　正 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 阿部　保 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | ○ |
| 安西　冬衛 | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 伊東　昌子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| 岩本　修蔵 | | | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 浦和　淳 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 江間　章子 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | |
| 岡本美致広 | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 笠原良三郎 | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | |
| 柏木　俊三 | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| 加藤　一 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 上井出　章 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 亀山　勝 | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 川田　総七 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 川村　欽吾 | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | |
| 北園　克衛 | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 楠田　一郎 | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 小林　善雄 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| 近藤　東 | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 酒井　正平 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | ○ | |
| 阪本　越郎 | | | | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | |
| 左川　ちか | | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| 荘生　春樹 | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ | | | | |
| 田中　克己 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | ○ |
| 長江道太郎 | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 春山　行夫 | | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 丸山　薫 | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 村野　四郎 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| 山中　散生 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ |
| 矢本　貞幹 | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |
| 米倉　寿仁 | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| T　O　K | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | |


Etoile de Mer
NO. 1. PREMIERE ANNEE.
FÉV. 1932. JAPON.
大妻女子大学図書館


ÉTOILE DE MER
No. XVI
DÉCEMBRE, MCMXXXIV, KOBE.
大妻女子大学図書館

「海盤車」— Étoile de Mer — 細目 —

第一巻第一号（昭和七年二月二十日発行）


表紙　Fernand Reger
詩二編　デェイムス、ジョイス、矢本貞幹訳　一
いつも聞く水の音、唄
海—旧作—　矢本　貞幹　二
横浜点望（＊散文詩）　麻生　正　三—五
第一章、関内、公園、山下町、山の手、根岸競馬場、三渓園、野毛山
類人猿（＊漢字・カタカナ　横書き）　加藤　一　六—七
類人猿、意欲ト白色、空の眼、住居、悲劇ガココニモアル、紫陽花、Monologue、ソロバン玉ニ就テ
郷土（断片五十章）　上井出　章　八—九
Rien que le.★　(Cato)　一〇
目次、奥付　（一一）


第一巻第二号


表紙　Otto Müller
人手　à G de Chirico　山中　散生　一
月夜の空間形式　Poésie Phènomènologique
（＊横書き）　矢本　貞幹　二
シアンペンの泡　北園　克衛　三
マリアの脚のエッフェル塔の頂点　a T. Yokobe
Cato　四
風　左川　ちか　五
染色体A及Zの肉眼的観察（＊横書き）　麻生　正　六—八
蜜柑、切り花、山上にて、火鉢、眠れなかった日の日記、Boxing、重要でないこと、映画について、常識について（Mに）、文章する、天候について、線について、髪、睡眠まで
他郷　加藤　一　九
他郷—第一章　特にMemoire風に、旅愁—他郷　第二章
＊疲労等に就ての通俗的な報告書　H. Katoh　一〇
目次、奥付　（一一）


第一巻第三号（昭和七年六月一日発行）


表紙　Otto Müller
人手　à G de Chirico　山中　散生　一
月夜の空間形式　Poésie Phènomènologique


第一巻第四号（昭和七年八月十日発行）


表紙　Otto Müller
白く　左川　ちか　一
仮睡の痕　矢馬　仲　二
深緑の季節　加藤　一　三
紙幣　麻生　正　四—五
チェーホフの驟雨　Cato　六
チェーホフの驟雨、鄙びた古帽子
ある心象　Poésie phénomènologique　矢本　貞幹　七
訳詩集　あ・さ　だ　八—九
D. H. Laurence
女に、私の関心の限りに於て（＊一篇の詩）、私のなかの太陽、窮極の実在、薄明

もし歌はせてくれるなら　H.D
アカシア（＊二篇）　Ivan Goll　加藤　一訳　一〇
ACACIAS
FINDU MONDE QUOTIDIENNE
目次、奥付　（一一）

第一巻第五号（昭和七年十月十日発行）

表紙　Pierre Bonnard
端書　北園　克衛　一
火の指　亀山　勝　二―三
火の指、星、叡智
アルバムの上に　岩本　修蔵　四
空の食欲　加藤　一　五
友に　麻生　正　六―七
階段　H. Katoh　八
幸福　S. Asoh　九
窓　矢本　貞幹　一〇―一一
海に近く（＊1、2）　Cato　一二―一三
月日記　あ・ゃだ　一四―一五
秋冷　加藤　一　一六
目次、奥付　（一七）

第一巻第六号（昭和七年十二月五日発行）

表紙　Pierre Bonnard
腎と肝　安西　冬衛　一
夜　丸山　薫　二
ある考へ　ハーバート・リード　矢本貞幹訳　三
午前　午后　北園　克衛　四
鐘の鳴る日　左川　ちか　五
バスにて　オルダス・ハックスリ　亀山　勝訳　六―七
飛行機　麻生　正　八―九
飛行機、ロマンと僕
ミルクホオルの王者　岩本　修蔵　一〇
En plein minuit　加藤　一　一一
仮死――フランシス　ピカビアに
ルイ・アラゴン　矢馬　仲訳　一二―一五
マルセル・プルウスト　山中散生氏訳
「ボオドレエル論」を広告する　加藤　一　一六―二〇
目次、奥付　（二一）

第二巻第七号（昭和八年二月十五日発行）

表紙　André Dunoyer de SEGONZAC
ホテルのむかふ　春山　行夫　一
海水着　他二篇　阪本　越郎　二―三
海水着、波、泳ぐ
白鳥と草履　麻生　正　四―五
白鳥と草履、人力車
人参（にんじん）　安西　冬衛　六
些細な湖畔　加藤　一　七
冬　矢本　貞幹　八
異郷的な泥酔　加藤　一　九
坂の進軍　麻生　正　一〇―一一

近況（＊短詩集）　加藤　一　一二―一四
十字路風景、旧知、噴水、鼓動、室内の森林、氷雨の中で、
Physiocrats
目次、奥付　（一五）

＊目次には、「異郷的な泥酔」と「坂の進軍」との間に
Nostalgia V　矢本　貞幹
の一行があるが、本文には、題名・本文ともにない。

## 第二巻第八号

## 第二巻第九号（昭和八年二月十五日発行）

表紙　Pablo Picasso
扉　"The Temptation"　Thomas Toft
サティに捧ぐる二つの小曲　山中　散生　一―二
アンゴの娘　岩本　修蔵　三
爽かな呼鈴　加藤　一　四
花が咲いてゐる　ブラヴィグ　イムブス　左川ちか訳　五―七
十字路　麻生　正　八
車窓点景　矢本　貞幹　九
朱肉　加藤　一　一〇
一片掌記　麻生　正　一一―一三
白布、白壁、嵐　一、嵐　二、曙、女、敗残兵と哨兵
春景　矢本　貞幹　一四
ルビコン河　加藤　一　一五
目次、奥付　（一六）
（広告）詩誌　MADAME BRANCHE　（一七）

アルクイユのクラブ　機関誌　7
発行所　東京市豊島区雑司ヶ谷3丁目　ボン書店
編集所　東京市日本橋区江戸橋1丁目楓川アパアト28号
アルクイユのクラブ

## 第二巻第十号（昭和八年八月十日発行）

表紙　Pablo Picasso
弥撒　荘生　春樹　一
刺繍された腕　阪本　越郎　二―三
豹　tiroux yamanaca　四
赤い山　安西　冬衛　五
詩　ハウワァド・ウイイクス　左川ちか訳　六―七
シャボンの泡をつけた寝間着
若しくは胡瓜のかほる台所に就て　加藤　一　八―九
シャボンの泡をつけた寝間着若しくは胡瓜のかほる台所に就て、
夕顔、海辺、葡萄棚、日傘、湖畔
驟雨　―未定稿―　近藤　東　一〇
失恋生誕　麻生　正　一一―一三
失恋生誕、"Tete d' Homme"Par Joan Miro、王様と乞食
挽歌（かなしびうた）　長江道太郎　一四―一五
鏡　岩本　修蔵　一六
水色のカーテン　加藤　一　一七―一九
水色のカーテン、rendez-vous のない広場、樹木等の訪問
樹の心　矢本　貞幹　二〇―二一
樹の心、僕の夏
野線　麻生　正　二二―二三
野線、世界、吋指、風呂敷模様

貝殻たち　その七つの美貌　加藤　一　二四―二七
　主として詩集「貝殻の墓」に就ての感想　麻生　正　（二八）
目次、奥付　二九
暑中御伺（＊詩）　山中散生訳　（三〇）
（広告）ラディゲ遺墨　レエモン・ラディゲ（ママ）
　春秋書房版

第二巻第十一号（昭和八年十月五日発行）

表紙　山中　散生
扉絵　Paul Wolff
背部　左川　ちか　一―二
アンケエト　春山　行夫　三―六
　1　de Sakamoto
　2　à Sakamoto
（注記）1　は阪本越郎が上のフレエズを課題して僕が下のフレエズをつけた。
　2　はその反対である。
感性と知性との曲線（1、2）　矢本　貞幹　七―八
のぼる　加藤　一　九
　のぼる、動き
陽の着物　麻生　正　一〇
転化の観念　アンドレ・ブルトン　ポオル・エリユアル
ラディゲ遺墨（＊書評）　山中散生訳　一一―一五
目次、奥付　加藤　一　一六―一七
（広告）ポエジイのリーフレット　Die Linie　2輯　（一九）
沼津市三枚橋60　Die Linie　刊行所　（二〇）
（広告）岩本修蔵　詩集　青の秘密　（二一）
　北園克衛　詩集　円錐詩集
　東京市豊島区雑司ヶ谷町3丁目　ボン書店

第二巻第十二号（昭和八年十二月二十日発行）

表紙　山中　散生
未明　加藤　一　一
ロベットとの恋　酒井　正平　二
冬　荘生　春樹　三
旅情　麻生　正　四
亀鑑　エズラ・パウンド　加藤　一訳　五
　亀鑑、白、地下鉄乗り場で
病める眼を（Ⅰ、Ⅱ）　矢本　貞幹　六―七
花束　加藤　一　八―九
　花束、野菜、コスモス、蘭、鈴、秋晴、捕鯨、秋冷、月、蜜柑
「青の秘密」に就いての感想　荘生　春樹　一〇―一三
青の秘密とそれから　加藤　一　一四
目次、奥付　（一五）

第三巻第十三号（昭和九年二月十五日発行）

表紙　Femme du Fouta-toro　（＊写真）
扉絵　（＊無署名）
アルス・ポエチカ　春山　行夫　一―四
音楽もなく　ポオル　エリュアル　山中散生訳　五―六
　音楽もなく、どちらへ、川

リルケ二章　阪本越郎訳　七—九
　厳かな時間、秋
旅憩　麻生　正　一〇
alba　加藤　一　一一—一二
音楽　米倉　寿仁　一三—一四
アミチェ　麻生正・加藤　一　一五—一六
欧羅巴ノ構図　笠原良三郎　一七—二〇
　欧羅巴ノ構図、夜間
旅信　加藤　一　二一—二二
　白い通路、紀州田辺港、海浜散策、温泉、白浜
閑雅な孤独　矢本　貞幹　二三—二四
　閑雅な孤独、僕の星屑
泉　加藤　一　二五—二六
　泉、出て歩く
さはれ彼等については黙せよ　加藤　一　二七—二八
　たゞみて過ぎよ
春日新九郎君に　加藤　一　二九—三一
　"Noli turbare circulos meos"
目次、奥付　（三二）

第三巻第十四号

怪談　麻生　正　四—六
　怪談、遺書（いち、に）、鎌倉の
夜のうた　江間　章子　七
お赦しあれ　山中散生訳　八—九
　ポオル・エリュアアル
藤の花　阿部　保　一〇
緑の葬礼　矢本　貞幹　一一
冬の時間（Ⅰ、Ⅱ）　笠原良三郎　一二—一三
空色のバルーン　加藤　一　一四—一五
　空色のバルーン、夏
ポエジイ　笠原良三郎　一六—一七
　★西洋梨　★窓の技術　★紅い罌粟とコロンビイヌ　★天使の商
　標　★田園の羽毛　★光線　★顔　★パイプ
憂鬱抄（1、2）　矢本　貞幹　一八—一九
セルロイドの家—四月より六月まで　加藤　一　二〇—二四
　旅想—よき友人らに、横浜、海港閑日の景物詩、泡、暮春詩集
目次、奥付　（二五）
（広告）加藤　一著　詩集　夜の馬　海盤車刊行所　（二六）
　神戸市葺合区八幡通五丁目一〇六　海盤車刊行所
　詩集　足風琴　衣巻省三　（二七）
　神様と鉄砲　岡崎清一郎詩集
　魔法　小村定吉詩集
　詩誌　エスプリ・ヌウボオ
　L'ESPRIT NOUVEAU
　ルイ・アラゴン　コント集　放縦　山中散生訳
　東京市豊島区雑司ヶ谷町5丁目　ボン書店

第三巻第十五号（昭和九年九月一日発行）

表紙　Femme du Fouta-Toro（＊写真）
肖像　加藤　一　一
琴のうた（1、2）　田中　克己　二—三

第三巻第十六号（昭和九年十二月一日発行）


表紙　Joan Miro
落魄　左川　ちか　一
東想情記　麻生　正　二―四
　東想情記、風、女優
唄　酒井　正平　五
　唄（空に、ひとつ）、唄（半島に雀が）
夜の将軍　笠原良三郎　六―七
雲の靴　加藤　一　八―一〇
　雲の靴、流転、旅宿、漁村
軽気球の謎　矢本　貞幹　一一―一三
　軽気球の謎、はつ秋の頌、返歌
眼鏡の片景　岡本美致広　一四
夜の馬の通る静かなる呼吸　麻生　正　一五―一八
　――加藤一「夜の馬」のために――
佐藤義美氏への短い言葉　楠田　一郎　一九―二〇
セルロイドの家　加藤　一　二一
　活字の散歩、秋の祭―à Sadam Asoh
（広告）詩集　夜の馬　（二二）
　神戸市葺合区八幡通五ノ一〇六　海盤車刊行所
目次、奥付　（二四）


第四巻・第十七号（昭和十年二月十日発行）


表紙　Margarete Hamerschlag
扉　Marianne Meyfarth
山彦海彦　山中　散生　一―三
　温泉宿、久米仙、丹那の里、浜風逆風、都落
窓々の色々　加藤　一　四―七
　窓々の色々（1、2）、針金、春、涼しい顔、風景、Cogito ergosum
肉体文学　麻生　正　八―一二
　クリスマスに、馬蹄、肉体文学、小春（Ⅰ、Ⅴ）
火の女　阿部　保　一三
人殺しの菫の花　笠原良三郎　一四―一五
切線（＊漢字・カタカナ）　川村　欽吾　一六―一七
植民地生れの婦人に　シャルル・ボオドレエル　阿部　保訳　一八―一九
海の獲物ら　加藤　一　二〇―二一
　泡、魚、海盤車、蛸、島
顔の空間形式　矢本　貞幹　二二―二三
　顔の空間形式、ある言葉―あるひとに
三原色の作文（＊エッセイ）　左川　ちか　二四―二五
私信（＊エッセイ）　笠原良三郎　二五
　＊「右は笠原君の本号所載の詩に関する編輯者宛の私信の一部である」云々の Cato による付記がある。
放縦に就て（＊紹介）　加藤　一　二六
　＊「放縦に就て」は山中散生訳のアラゴンのコント集（ボン書房刊）
目次、奥付　（二七）
（広告）山中散生詩集　火串戯　（二八）
　東京市神田区駿河台下　飯倉書店

第四巻第十八号（昭和十年四月十日発行）

表紙　Margarete Hamerschlag
空想　麻生　正　一―三
　空想、火山閉塞
ポカン　酒井　正平　四―五
　ポカン、ハト
童話風な春季―鳥獣戯画　加藤　一　六―八
流れ　柏木　俊三　九
催眠術　田中　克己　一〇―一一
花苑の戯れ（Scene I、Scene II）　左川　ちか　一二―一三
明星　矢本　貞幹　一四―一五
　明星、眼
透明な雲　加藤　一　一六―一七
目次、奥付　（一八）

第四巻第十九号（昭和十年八月十日発行）

表紙　Margarete Hamerschlag
扉　絵・Erich Wagner
　詩・城崎温泉にて―麻生　正に　加藤　一
凝視の巷で路を粉砕するために　ポオル・エリユアール　一―二
　Trad. de Tiroux Yamanaka
池辺詩集　麻生　正　三―六
　池、黒土、生誕、炭、龍
一九三五年の詩人（＊詩）A・C・ボイド　矢本貞幹訳　七―八
南の泡　加藤　一　九―一〇
SALON DU THE BLANC　川村　欽吾　一一―一二
目次、奥付　（一三）

第五巻第二十号（昭和十一年一月一日発行）

表紙　Alberto Giacometti
扉　Rene Magritte
La Camargue　T O K　一
　＊フランス語の詩
舞踏法―麻生正に寄せて　山中　散生　二
季節　左川　ちか　三
微笑　加藤　一　四
遊離窒素　麻生　正　五―七
　遊離窒素、いかなれば、土器
操作室　荘生　春樹　八
風説　加藤　一　九
Dans mon Jardin（I、II）　矢本　貞幹　一〇―一一
エリユアール詩鈔（XX、XXVI、XI）
　Trad. de Tiroux Yamanaka　一二―一四
断片　フランツ、カフカ　加藤　一訳　一五
Jouer au Feu―山中散生氏詩集　加藤　一　一六―一七
目次、奥付　（一八）

第五巻第二十一号（昭和十一年六月一日発行）

表紙　Alberto Giacometti
扉　René Magritte

書　酒井　正平　一―二
書、（東坡の外任を乞ふなど）
摘花　加藤　一　三―五
摘花、春の海
序曲（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）　麻生　正　六―八
続いかなれば　加藤　一　九
ありふれた馬の笑ひの如くに
涙　Tokuro Hajime　一〇
涙、雨　麻生　正　一一―一二
左川ちか子氏のために（＊詩）　村野　四郎　一三―一四
左川さんの追憶記　江間　章子　一五
左川ちかノ詩　田中　克己　一六―一七
左川ちか氏のこと　加藤　一　一八
目次、奥付　（一九）

## 第五巻第二十二号（昭和十一年十一月五日発行）

表紙　Andre Breton
扉　米倉　寿仁
天の網（一、二）　山中　散生　二―三
調査書　小林　善雄　四
逃亡　麻生　正　五―七
逃亡、歓喜
Ode　T O K　八―九
展望　加藤　一　一〇―一三
展望、夏の海
田園　伊東　昌子　一四―一五
無題　矢本　貞幹　一六―一七
無題―a ma N――、寂身　加藤　一　一八―一九
薔薇色の太陽　麻生　正　二〇―二一
朝
朝、夕空
春への招待――江間章子氏詩集　加藤　一　二二
若き蛇――川田総七氏詩集　麻生　正　二三
目次、奥付　（二四）
（広告）★透明ナ歳月★　米倉寿仁　第一詩集　（二五）
東京銀座西八ノ九　西東書林

## 第六巻第二十三号（昭和十二年四月三十日発行）

表紙　Andre Breton
大木　坂本　越郎　一―二
大木、早春
風の影　加藤　一　三―四
譜　酒井　正平　五―六
亀に送る手紙　麻生　正　七―八
雲の眼鏡　加藤　一　九―一〇
旅行記――山陰にて二篇　長江道太郎　一一―一二
獣と盞　麻生　正　一三―一四
獣と盞、食卓
鯨とポンプ――A mon Sadam Asoh　加藤　一　一五―一六
目次、奥付　（一七）

## 第六巻第二十四号（昭和十二年十一月一日発行）


表紙　Andre Breton
口絵　Oscar Dominguez
写真（Tourist's Dream）（＊無署名）
象と花苑　阿部　保　一―三
わが家の平和―ベルメエルの神話の影に　山中　散生　四―五
風鈴　加藤　一　六
蚊の舞　麻生　正　七
　蚊の舞、玉手箱、秋蛾　七―九
青ききのふ　浦和　淳　一〇
海岸夏景―一九二五年頃のこと　田中　克己　一一
双眼　加藤　一　一二―一三
子孫―或は血……　川田　総七　一四
三角洲と黎明　麻生　正　一五
ある詩人　加藤　一　一六―一八
米倉寿仁氏の詩集「透明ナ歳月」に就て　加藤　一　一九―二〇
目次、奥付　（二一）
（広告）ポオル・エリユアール著　山中散生訳
　散文詩集　或一生の内幕或は人間の尖塔
　東京小石川駒井町三　春鳥会　（二二）


### 「海盤車」注

第一巻第一号

＊ Cato ……加藤一。後出の H Kato, H Katoh Hajime も同じ。

第一巻第三号

＊ T YoKobe……不詳。

第一巻第四号

＊矢馬仲……山中散生。後出の Tirous yamanaka も同じ。

第二巻第十号

＊加藤一のエッセイ「貝殻たち　その七つの美貌」の副題中の「貝殻の墓」は阪本越郎の詩集。昭和八年刊。

＊ S Asoh, あ・さだ……麻生正（正＝さだむ）。

＊「暑中御伺」には、加藤一、麻生正の二人と思われる、肩を組んだ写真が添えられている。

第三巻第十三号

＊加藤一「さはれ彼等については黙せよ……」の最後に、「次号は多分山中氏編集のエリュアル特集号になるでしやう。」との予告がある。第十四号は未見。

第三巻第十五号

＊加藤一「セルロイドの家」中の一篇「暮春詩集」は阪本越郎の詩集。昭和九年刊。

第五巻第二十号

＊ TOK ……不詳。第五巻第二十号の Tokuro と同一人物と思われる。

### おわりに

「海盤車」全二十四号のうち、本学（大妻女子大学）図書館所蔵のものは全十九号であり、細目の、第二巻第九号、第六巻第二十四号の二号については、澤正宏氏より御送付頂いたコピーによるものである。

この稿を成すに当たって、同誌の執筆者の中に左川ちかの名があることに注目し、『左川ちか全詩集』（森開社、昭和五八年十一月刊）の編者の一人である曽根博義氏に欠号についての問い合わせをしたところ、欠号について心当たりはないが、石神井書林の内堀弘氏に尋ねてみてはどうか、という御教示を頂いた。そこで、内堀氏に問い合わせたところ、やはり、所蔵先に心当たりはない、とのことであったが、御返書により、第十四号が「日仏同時発売といわれる「エリュアールへのオマージュ号」」であること、「江間章子詩集『たんぽぽの呪詛』への解説文に「海盤車」（全24冊）との記載がある」との情報

を得ることができた。一方、澤正宏氏より突然の来書があり、内堀氏より飛高が「海盤車」の欠号を探しているが心当たりはないか、との電話をもらったが、故鳥居昌三氏の所蔵雑誌をコピーさせて貰ったものの中に同誌も数号含まれているので、必要な号を知らせよ、とのことで、内堀氏が澤氏に連絡を取って下さっていたことを知ったのであった。そこで、早速、澤氏に欠号を連絡し、二号分のコピーを送って頂いたのである。曽根氏、内堀氏、澤氏に深く感謝申し上げる次第である。

（追記）再校を印刷所に返送した段階で、内堀氏より、「海盤車」に関する左の記事を御教示いただいた。

シュール系雑誌「海盤車（ポトフール・デュ・メール）」の昭和9年7月号（14号）は、『ポオル・エリュアールへのオマージュ』という特漉和紙表紙（表題等仏文）で限定50部、日仏同時発表という国際的な内容であり清潔高雅な限定版である。本文も邦文のほかに西脇順三郎（仏・英）山中散生（仏）北園克衛（英文）の各氏が欧文の献詩。因にこの本には前年6月に創刊の「MINOTAURE」（ミノトール）から早くも作品の紹介がのるなどシュールレアリスムの邦訳文献としても第一級のものである。（本文横書）

——佐々木桔梗『五行山荘限定版書目細見』（昭和54年6月、プレス・ビブリオマーヌ刊）